

「日中植林・植樹国際連帯事業」北京大学学生訪日団 参加者の感想（抜粋）

○よかった点：東京大学教授のセミナーで日本の防災対策について学び、日本の防災レベルがよくわかった。

要改善点：しながわ防災体験館ではもっと多くの防災体験をし、知識を学び、防災措置を見学できるとよい。

参考になったこと：

1. 日本の水再生技術、水再生に対する重視、有明水再生センターによる周辺環境の改善。水再生技術は浄化レベルが高い。特に有明水再生センターは、空間をあまり占有せず、プール、テニスコートなどが作られており、人々に利用され、受け入れられる施設となっている。
2. 日本の規則や法律に対する意識は、中国社会が法制化する上で参考になる。
3. 日本の旅行業のサービスは中国の同業者が学ぶに値する。

帰国後伝えること：

1. 日本人はフレンドリーで、おもてなし好き。ホームステイの際、家にいるような気持ちになった。
2. 日本人は中国文化にとっても興味がある。
3. 日本は、環境・防災・植樹面など、中国が参考にすべき点がある。

○日本へ来るのは二度目だが、今回の交流訪問はとても印象に残った。日本の社会や文化をより深く理解することができた。

まず、今回の活動テーマは植林植樹と環境保護・防災だったので、東京の有明水再生センターやしながわ防災体験館を見学した。以前から日本のゴミ分類が非常に厳しく、様々なゴミが適切に処理され、環境保護に役立っていることは知っていたが、今回の見学を通じ、日本では水処理もしっかり行われていることがわかった。特に驚いたのは、東京では100%汚水処理ができており、水再生センターが住民の生活に悪影響を与えるところか、住民に役立つ施設となっていることだった。水資源を大切にすることは他の面にも表れており、トイレで流す水も、手を洗った後の水がむだなく使われている。

また、日本の森林保護活動もとても印象に残った。気候の関係もあり、日本の山には木々が生い茂っている。日本人はむやみに伐採をしないため、地面がむき出しになっていない。植樹活動が行われた明日香村でも環境への配慮がなされていて、村の建物は10mより低く、景観になじんでいた。自然を敬い、自然を守る姿勢は尊敬に値する。

日本のスタッフのまじめな仕事ぶりを学びたい。

○1. 日本の防災は「自分の命は自分で守る」ことを重視しているが、中国人には自助の知識や能力がなく、災害が起きたときに受動的なので、改善すべきだ。

2. 日本の防災はコミュニティごとに行われ、互助が強調されているが、中国では居民委員会や村民委員会はまだ十分に構築されておらず、防災面で十分な役割を果たせていない。コミュニティごとにすれば、コストが安く済み、効率が高いので、中国は参考にすべきだ。

3. 日本の学校での防災訓練は長い間続けられているが、中国では継続性がなく、義務的に行われており、実際の効果よりもパフォーマンスとしての意味が大きい。形式主義を廃し、全面的に防災科学の普及と訓練を行うべきだ。

4. 日常生活において、日本人は細やかで常に他の人へ配慮している。このことは、ホテルの施設、図や複数言語が示された標識などを見ればわかる。発展途上国である中国は、ハード面で飛躍的な発展をし

ているが、ソフト面ではまだ十分とは言えない。もっと細やかさを大切にし、緻密で大らかな大国のイメージを作るべきだ。

○日本が自然に敬意を持ち、災害発生前から十分な防災対策をしていることが印象深かった。東京大学の教授が水害対策について、ランク分けして防災対策を行っており、東京には大きな洪水対策用のインフラシステムがあると語っていた。日本の災害に対する畏敬は、単なる恐れではなく、理性と情熱とを兼ね備えたものであることが分かる。中国の防災システムの構築状況についてはあまり知らないので比較できないが、日本のこうした姿勢は学ぶ価値がある。

日本人のまじめな仕事ぶりにも感動した。私が出会った日本のサービス業の人たちは皆、礼儀正しく、フレンドリーで責任感があった。仕事に対する真摯な態度は中国人にも広めるべき。

また、ホームステイ先での話を通じて、両国はとてもよく似ていると思った。例えば、大前研一が述べているように、日本は「低欲望時代」に入っており、中国も「仏系」青年の問題に直面している。両国が交流を深めることで、共通の課題を解決するのに役立つだろう。

○日本は中国と比べて、より安全を重視している。例えば、各所に AED が設置され、部屋には懐中電灯が置いてある。これは日本に自然災害が多いことと関係している。日本人は常に人間関係の調和を求めており、これは社会の調和という面からもよいことだ。だが、個人的には抑圧を感じる。今までの日本は、礼儀マナーを重視しすぎ、個性や精神が束縛されていた。だが、社会が発展するとともに、日本人も変わろうとしており、実際に少しずつ変わってきている。この数日間で出会った日本の若者たちはポジティブで積極性があり、生活を楽しんでいる。新しい世代がこのような姿を保つことができれば、将来は明るく、国も新しく生まれ変わることができるだろう。

○有明水再生センターの見学で、小学 4 年生の絵の作品を見た。社会科の授業でゴミ処理場などの関連施設を見学した時のものだった。このように小さい頃から「日頃のゴミ分類はこういう意味があったのだ」と環境の重要性を意識し、関連知識を学ぶことにより、子供たちはよりよい環境保護活動を行うことができる。これも日本全体の環境がすばらしい理由である。中国も環境保護の科学普及活動が行われているが、実践と参加が足りていない。自分で体験すれば、科学普及は更に共感を呼び、よりよい効果が得られるだろう。

○植樹活動や環境防災関連の視察を通じて、日本は防災システムが整っており、防災意識が高いことがわかった。年齢ごとに一貫性のある教育が各分野について行われている。全体をカバーする防災メカニズムやシステムは中国も参考にすべきだ。また、交流活動を通じて、日本が社会秩序や礼儀を大切にしていること、日本人が親切だということを感じた。中日両国は一衣帯水の友好国だ。両国の青年交流を更に推進し、友好を深め、中日青年交流と中日友好事業に関わり、共に人類の運命共同体を創りたい。

○全体に感じたのは、資源の節約利用や廃物処理の面で日本の技術は進んでいることだ。環境保護や省エネの意識が高い。組織活動の効率がよく、細やか。受け入れ側が一生懸命、効率よく進めてくれたことに感謝している。

1. 受け入れ側が効率よく、細心の注意を払って進めてくれた。100 人の大きな団体が日本の最も賑やかな街で行動したにも関わらず、全体として秩序を保ちながらスムーズに進められた。受け入れ側の熱意と責任感に感謝している。

2. 日本人は環境保護や防災面の意識が高いので学ぶべき。資源不足や環境破壊に対する不安があるため、

日本人は省エネや環境保護の意識がとても高い。

3. 日本は防災面の技術が進んでいる。すべての科学技術は最終的には人類に益をもたらし、また、人類に益をもたらすものでなければならない。治水浄化、鋼を溶かさないう溶接など、日本の技術はすばらしく、業界を牽引できるレベルにある。問題というのは歴史が発する琴の音のようなもので、生存環境の問題が科学技術を発展させ、科学技術が生活を変え、未来を創出していくのだ。

4. ホームステイは一晩という短い時間だったが、奈良の人たちはとても素朴で親切だと感じた。中国と日本は一衣帯水の隣国。両国国民の友好交流を末永く継続させ、共に手を携えすばらしい未来を築いていきたい。

○日本は街がきれいで、資源の利用効率が低い。国民は全体的に教養があり、礼儀正しく、規律を守る。今までに旅行した 30 数カ国の中で最も印象がよかった。自分の目で実際に見たこの日本が第二次世界大戦中のあのような行為を行ったとはとても信じられないが、いずれにしても歴史は変えられない。今できるのは、両国が今後友好関係を保ち、二度と戦争を起こさないことだ。

日本は環境保護や資源の有効利用という面で、中国が学ぶに値する。環境保護の理念が人々に根付き、環境保護によるコスト負担を受け入れている。日本ではゴミを捨てるのがこれほど大変だとは思わなかった。街にはほとんどゴミ箱が見られないが、それでも街がきれいに保たれている。これは国民一人一人が努力しているからだ。中国ではゴミの分類が始まったばかりで、多くの家庭はまだ慣れていないので、日本の経験は参考になる。また、日本の街には家庭用のソーラーパネルが多く設置されている。中国もソーラーパネルの設置を推進し、資源の有効利用をすべきだ。

中日両国は共に高齢化、若者の結婚・出産率低下などの問題に直面している。日本は高齢者が多く、いろんなところで白髪の高齢者が働いていて驚いた。80 歳の高齢者が農作業や車の運転をすることができ、健康であるのは、日本の医療システムのおかげだ。中国も日本を参考にし、社会において均等化をはかり、全国民の教育・医療レベルを向上させ、市場化一辺倒になるのを避けるべきだ。

○日本人の防災意識は非常に高く、防災設備も整っている。政府と民間の防災対策は充実しており、十分な準備ができています。これにより災害が発生した時に社会的な負担を軽減し、生命と財産の損失を最大限抑えることができる。

この夏休みに北京大学学生訪日団の活動に参加できて幸運だった。1 週間の期間中、植樹活動や環境防災分野などの視察を行い、東京・大阪・奈良・京都で忘れられない時間を過ごした。

奈良の明日香村では、友好を表す 3 本の小さな木を植えた。学生たちは力を合わせ、明日香村のスタッフの指導のもと、穴を掘り、木を植え、水をやり、プレートをかけた。その間、村のお年寄りから日本の歴史・文化・民俗や環境保護事業の理念と実際の活動について聞くことができた。環境保護の意識を常に持ち、友好の木を常に青々と茂らせ、文化交流を深めていきたい。

大阪大学や日中友好会館、しながわ防災体験館では、講義を聞き、日本の若者と交流し、救命道具や消火器の使い方を体験するなど、多くのことを学んだ。活動日程がしっかりと組まれ、各方面で細やかな配慮がなされていた。一連の活動や体験から、日本人のまじめさ、細やかさを感じ、学ぶところが多かった。

中日両国は一衣帯水であり、隋唐の時代から密接な関係を持ち、友好的に交流し、互いに学び、共に発展し、アジアの大国となった。両国が共にこの貴重な友好関係を守り、両国の国民に幸せをもたらすことを願っている。

○日本人は防災意識が非常に高く、各段階において準備をしっかり行い、防災訓練から災害発生後の復

旧まです緻密に考え、人や財産の損失をできる限り抑えようとしている。環境保護意識の面でも具体的な施策や効果が見られ、国の発展を支えるのに役立っている。

わずか7日間の短い交流・学習だったが、最も印象に残ったのは、日本が細やかさを大切にした温かみのある国だということ。防災面では、国のレベルから一般人に至るまで未然防止ができています。「自分の命は自分で守る」という意識が防災において重要な役割を果たしている。ゴミの分類などの環境保護意識の教育では参考にするべき点がある。

明日香村では、日本人の優しさや善良さを感じた。心づくしのおもてなしを受け、自分の家にいるかのようにくつろぐことができた。明日香村で共に中日友好の木を植えたが、環境保護や緑化の種を心に蒔いただけでなく、ヤマボウシに象徴される友好の心をしっかりと根付かせることができた。

中日両国は一衣帯水の関係にあり、相互理解を進め、交流を深める機会を増やすことができる。今後、日本を訪問する機会が増え、日本の友人がたくさん中国を訪問し、両国の友好が末永く続くことを願っている。